AJIBI News

vol. 96

あじびニュース

人と人がつながる
コミュニティをつくる

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

AJIBI Discuss

あじびのこと話そう

#03 教育普及

アーティスト・イン・レジデンスと連動したワークショップ

アジア美術の理解を深めるため、人との交流を軸にした体験的な教育普及活動を行うあじび。担当者たちが考えるこの取り組みの意義とは？ あじび学芸課から山木裕子、李昭賢、蒲池昌江が語ります。

山木（以下 山）　教育普及と一口に言っても内容が幅広いので、今回は教育分野に絞って話をしましょう。主な活動のひとつが、アーティスト・イン・レジデンス（以下 レジデンス）の滞在アーティストが子どもと行うワークショップです。

蒲池（以下 蒲）　あじびを象徴する事業であるレジデンスと連動させることで、独自性のあるワークショップが実施できていると思います。またアーティスト自身がプログラムを考えるので、内容もすごくクリエイティブです。

李　一般的なワークショップはお手本やキットがあって、明確なゴールが見えていることが多いですよね。でも、あじびのワークショップは個々人の創造力を大切にしていると思います。

山　多様な背景を持つアーティストと一緒に取り組めるのもポイントですよね。創作活動を通して、子どもたちが世界のさまざまな地域の文化に触れることができる。

蒲　あじびの施設を利用して、アーティストの技法を取り入れたワークショップが体験できるのも利点だと思います。部屋の壁に穴を作って、部屋ごとピンホールカメラにしたりとか。物語の登場人物のコスチュームを制作して、スタジオに大きなブルーバックを垂らして撮影し、背景を合成するといった大掛かりなものもありましたね。ちなみにそのワークショップを実施したのが、担任の先生が韓流好きのクラスで、10人くらいの中学生が「冬のソナタ」のペ・ヨンジュンになりきって、ずらっと並んでいる様子は圧巻だった（笑）。

一同　（笑）。

答えは一つじゃない。アートとのふれあいを通してあじび学芸員が伝えたいこと。

山木裕子（学芸課長）

李昭賢（教育普及専門員）

蒲池昌江（美術交流専門員）

WORKSHOP #1

2014年滞在アーティストのコビール・アフメッド・マスム・チスティー（バングラデシュ）とのワークショップ。「昨日見た夢」をテーマに、有田小と千代小の児童がアニメーション作品を共同制作した。

全てがオリジナル！ あじびのワークショップ

WORKSHOP #2

あじびの所蔵作品である《リキシャ》から発案した、オリジナルリキシャをつくるワークショップ。レジデンスの期間外でも実施できるワークショップとして、2023年から毎年開催している。

WORKSHOP #3

2009年滞在アーティストのアンキ・プルバンドノ（インドネシア）とのワークショップ。愛宕小、原小、警固小の児童が参加し、不要になったおもちゃを組み合わせて新たな作品をつくり出した。

李　そうしたワークショップの数々を1999年から積み重ねてきたことも、あじびならではの価値と言えますよね。

山　多い時には1年に10種類くらい実施することもありましたしね。年平均13回で他の美術館と比べると圧倒的な数だと思います。

蒲　しかも「今回は小学何年生が50名来るので、それに合ったワークショップを考えてください」という感じでアーティストに依頼するので、全てのプログラムがオーダーメイド。

山　だからこれまでの活動をまとめたワークショップ集のような本を出したいんですよね。かれこれ10年くらいずっと言い続けているんですけど（笑）。本当に多種多様な実績があるので、「200名の中学生向け」や「特別支援学校の生徒向け」など、学校の先生たちにとってもいいヒントになるんじゃないかなと。

対話型鑑賞なら安心して発言できる

李　もうひとつの代表的な活動が対話型鑑賞ですね。

蒲　対話型鑑賞は、もともとはMoMA（ニューヨーク近代美術館）で開発された鑑賞法。ファシリテーターの3種類の質問に答えるというシンプルなものですが、美的思考はもちろん、観察力、認知能力、論理的思考、言語能力、コミュニケーション能力も高められるとされています。最近だと学校や医療現場、ビジネスパーソンの間でも注目されていますね。

山　対話型鑑賞のポイントは、何を答えてもいいというところ。現代の社会や学校は「正解」を求めがちで、間違いを恐れて発言できない場面も多いけれど、対話型鑑賞では「あなたがそう感じたのだから、それでOK」となる。

李　安心して発言できれば自己肯定感も高まるし、いろんな意見も出やすくなりますよね。

山　さらにその意見を聞いた人がまた考えを巡らせるから、思考がどんどん深まっていく。

蒲　鑑賞の価値が理解されるようになったのはすごくいいことだと思います。昔は図工や美術の授業も鑑賞より実技重視でしたよね。絵が上手じゃないとダメ、みたいな。ギターが弾けないから音楽が苦手だと思う人は少ないのに、なぜか絵が下手だと美術が苦手に感じてしまう。考えてみるとおかしな話ですよね。

山　私がまさにそれだった！上手に絵を描くんじゃなくて、その人なりの絵を描くことが大事なんですけどね。

蒲　正しさを追求するのではなく、たくさんの答えが見つ

かっていくのがアートの面白さ。観る人の数だけ答えがあるということを対話型鑑賞で体感できれば、社会課題に直面した時も、柔軟な発想で解決策を考えられると思います。

アートの世界に終わりはない

李　対話型鑑賞のファシリテーターを務めるのは、案内・解説ボランティアの方々です。中には開館当初からいらっしゃる大ベテランも。ボランティアさんたちの存在がなければ、教育普及の活動は成り立ちません。

山　毎日13時から15時まで展示室に常駐されていて、一般の来館者も気軽にガイドを依頼できる。美術館と来館者をつなぐ、とても重要な役割を担ってくださっています。

蒲　私たち学芸員よりも、来館者に近い立ち位置で話してくださるのがありがたいですよね。実際に「雑談しながら観られてとても楽しかった」や「一人で観ていたらここまで深くは理解できなかった」など、来館者の喜びの声を多くいただきます。そんなお土産を持ち帰っていただけるのは、ボランティアさんたちがいてくださるからこそ。

山　ただ、そうした力をお借りしながらも、まだまだアジア美術の面白さや奥深さを市民に伝えきれていないのがあじびの課題です。ワークショップや対話型鑑賞以外にも、もっと作品と人との交流の場を増やしていく必要がありますね。

蒲　そのためには、多様な来館者に楽しんでいただける仕組みづくりもしていきたいです。例えば高齢者を対象に、収蔵作品を活用した回想法のプログラムを展開するなど。

李　体の不自由な方に向けたプログラムなども展開できるといいですよね。あとは作品を鑑賞するためのツールももっと充実させられたら。その一環としてアートカードを学校に貸し出したいと思っていて、市内の高校と一緒に学習プログラムを考えたりと、活かし方を模索しているところです。

蒲　「この作品を理解した」という終わりがないのがアートの世界。アジア美術の新しい答えがたくさん生まれるよう、これからも働きかけていきたいですね。

鑑賞のお供に！
あじびのアートカード

あじびの収蔵作品がプリントされたカードセット。来館前の予備鑑賞や来館後の調べ学習などさまざまな活用法があり、楽しみながらアートに親しむことができる。

「しゃべりながら観る」
対話型鑑賞

美術館と来館者をつなぐ案内・解説ボランティアさん

来館者に対して作品解説や館内の施設案内を行う。あじびで活動するボランティアの中で最も育成期間が長く、養成研修に加えて実地研修も必要とされる。

学校見学のガイダンスの様子

REPORT

約5500点の当館所蔵作品からアジア現代アートの傑作をご紹介する「ベストコレクションII―しなやかな抵抗」展の会期中、当館ではさまざまな角度から作品の世界をお伝えすべく、今回初挑戦の試みもふくむ関連イベントを実施しました。そのレポートをぎゅっとお届けします！

アジア美術の新しい楽しみ方がここにも！
展覧会の魅力を探る企画展関連イベント
人気のラインナップをレポートします。

「駱駝」を語りつくす！ あじびナイト・ダイアログ

日時：2025.3/2　17:30~19:30
会場：福岡アジア美術館　アジアギャラリー
主催：福岡アジア美術館、Global Shapers Community Fukuoka

出品作品のひとつホアン・ヨンピン《駱駝》について、福岡在住の様々なバックグラウンドを持つ参加者が対話しました。異なる文化や宗教の要素が散りばめられた本作をどう読み解くかは千差万別。お互いの意見にびっくりしたり感心したりしながら、アートを通して対話することで自分とは違う新しい考え方や見方に出会う濃密な時間を過ごしました。

多言語（英・中・韓）によるギャラリーツアー

日時：【英語】2024. 12/8、2025.3/23【中国語】2025.2/1
【韓国語】2025.2/23　各回14:00~14:45
会場：福岡アジア美術館　アジアギャラリー

当館を訪れる多様なルーツを持つ方々に向けて、英語・中国語・韓国語で本展の見所を解説する多言語ギャラリーツアーを初開催しました。各言語の話者の方のほかにも、語学学習中という方もお越しくださり、いつもと違う言語で語られる作品の魅力やエピソードに、熱心に耳を傾けられていました。

アジビをアジみ！

アジア美術をちょっと味見してみたらもっと知りたくなる、子どもから大人まで楽しめる３つのイベントを開催。
子どもが自由に遊ぶ場所を手掛ける「PLAY！PARK」との共同企画によるものです。

日時：2/1～4/8
会場：福岡アジア美術館 アートカフェ
主催：福岡アジア美術館
企画：PLAY！PARK

「アジア料理と包む！遊ぶ！」

あじびに巨大なアジア料理の遊具が出現！マントウ／バオズ（中国）に頬ずりしたり、サモサ（インド）に包まれたり、生春巻き（ベトナム）に巻かれたり、身近な食べものを通して、子どもから大人までたくさんの方がまさに体いっぱいでアジア美術を「アジみ」しました。

「アジア吹雪」

アジア各地の言葉で「だいじょうぶ」と書かれたカラフルな紙が舞い上がりました。参加した子どもたちはどの言葉をキャッチできるか大盛り上がり。声に出して言ってみたり、あじび特製のマップに貼り付けて集めてみたり、アジアの言葉にぐっと近づいた時間でした。

「ウタマのプロフ帳 ～いろんな私がいっぱいのプロフィール手帳をつくろう！～」

ホー・ズーニエン作品から企画したワークショップ。シンガポールの名付け親と言われる王「ウタマ」に無数の人物像や逸話があることにならい、作品をみんなで鑑賞したあとに、自分のプロフィールを他の人に想像で描いてもらい、たくさんの自分が詰まったオリジナルの「プロフ帳」をつくりました。意外な自分像が見つかったかも？

EXHIBITION

コレクション展 Collection Exhibition

アジアコレクション
この手が未来を編み直す

Asia Collection: Hands Reweaving the Future

2025.4.24［木］～6.22［日］
会場：アジアギャラリー［7階］

2025年度春のコレクション展は、アジアの暮らしや文化を取り込むことで、斬新な現代美術の表現を生んだアーティストたちの作品約50点を紹介します。布、糸、刺繍、籐細工、切紙などの素材の面白さと巧みな手わざ、さらに洗練されたデザイン感覚と造形力に注目です。手わざの力から、きらめく光と影の空間、そして瞑想の森へ。混迷を深める世界において、文化のルーツや暮らしに未来を生きるヒントを探ります。

イン・シウジェン（尹秀珍）［中国］
《スーツケース2001》2001年　撮影：権藤真

ウー・ジエンアン（鄔建安）［中国］《手・脚》2008年（部分）　撮影：藤野拓人

パンヤー・ウィチンタナサーン［タイ］《魂の旅》2001年

モンティエン・ブンマー［タイ］
《溶ける虚空／心の型（座像）（仏頭）》1998年

ウォン・ホイチョン［マレーシア］《暗い穴》2009年

タン・ダウ（唐大霧）［シンガポール］
《米をつくる人々》1988年

ユン・ソクナム［韓国］《族譜》1993年

コレクション展 Collection Exhibition

ベストコレクションIII

Best Collection III

7.5［土］～11.30［日］　会場：アジアギャラリー［7階］

世界で活躍するスターアーティストの傑作を一堂に会して紹介する「ベストコレクション」展。第3弾となる今回は、7階アジアギャラリー全体を使い、これまでで最も大きな規模で開催します。それぞれの時代や地域を象徴するようなアジア美術の代表作の数々を、ダイナミックな空間のなかでご体感ください。

「オバケ？」展 © Keiko Sena

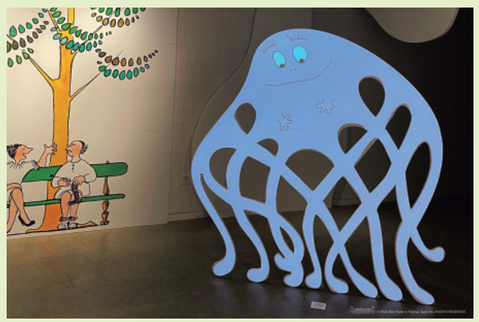
特別企画展 Special Exhibition

おいでよ！夏の美術館 vol.2
オバケ？展

Welcome! Summer Art Museum vol.2 Ghosts?

7.10［木］～8.31［日］
会場：企画ギャラリー［7階］
9:30 - 17:30［最終入場17:00まで］
※通常の観覧時間と異なります（会期中無休）

「絵本ミュージアム」の後継として、昨夏より始まった親子で楽しむミュージアム！
今年は、古今東西、絵本に、物語に、アニメに、落語にさまざまな姿で登場するオバケが大集結。「オバケ屋敷」「オバケ湯」「オバケ工場」などの体験型展示で、会いたくないのに、ちょっと会ってみたい摩訶不思議なオバケを楽しみ尽くす夏の展覧会です。



「バーババパパ」に会えるゾーン　PLAY! MUSEUMでの展示風景
© 2025 A.T. & T.T.

主催：福岡アジア美術館、西日本新聞社、テレビ西日本、西日本新聞イベントサービス　企画協力：ブルーシープ

特別企画展 Special Exhibition

ベトナム、記憶の風景（仮）

Vietnam, The Landscape of Memories (tentative)

9.13［土］～11.9［日］　会場：企画ギャラリー［7階］

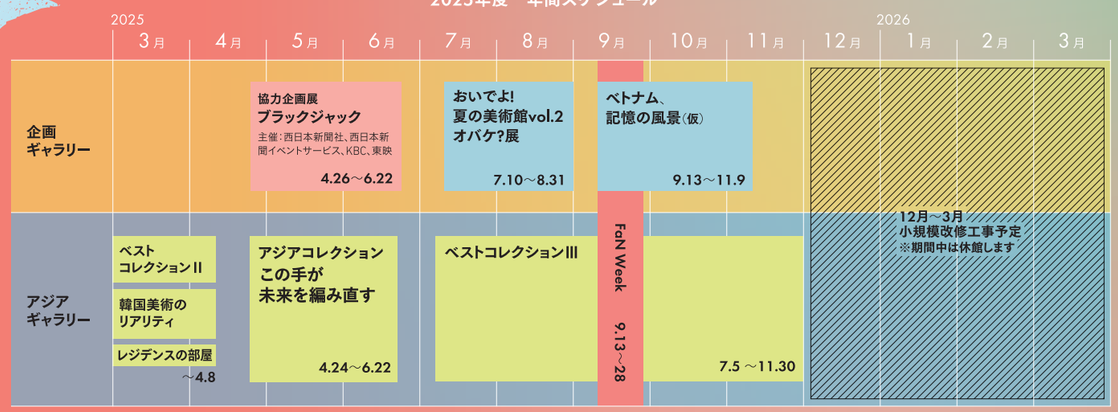
ディン・キュー・レ［ベトナム］《南シナ海ピシュクン》2009年

グエン・ファン・チャン［ベトナム］《オーアンクァン遊び》1931年

ベトナム戦争終結50周年記念展となる本展では、その激動の歴史を辿りながら、近代のベトナム人画家が祖国の理想の風景を描き出した絵画から、個人の秘めた記憶をもとに歴史を語りなおす現代美術まで、ベトナムを巡って表現されてきたイメージや記憶を多様な作品から読み解きます。また特設コーナーでは三谷文化芸術保護情報発信事業財団による、ベトナムの絹絵の巨匠グエン・ファン・チャンの作品修復プロジェクトを紹介します。

SCHEDULE

2025年度　年間スケジュール



※展覧会タイトル、会期は変更することがあります

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

https://faam.city.fukuoka.lg.jp

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1リバレインセンタービル7・8階　TEL 092-263-1100
7.8F, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan

ギャラリー観覧時間　9:30-18:00（金曜・土曜は20:00まで）※ギャラリー入室は閉室30分前まで
開館時間　9:30-19:30（金曜・土曜は20:00まで）あじびホール、アートカフェ等
休館日　毎週水曜日（水曜が休日の場合はその翌平日）
年末・年始（12.26 ー 1.1）

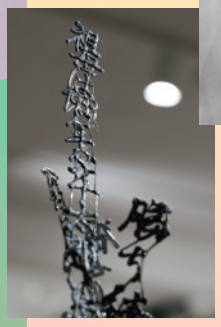
あじびニュースvol.96　2025年4月1日発行
企画・編集・発行：福岡アジア美術館　編集・執筆：後藤麻与、片桐絵都
デザイン：吉田朋史［9P］　印刷：株式会社四ヶ所

Artist in Residence TOPICS 2025

2025年2月、開館以来初！ 海外交換レジデンス・スタート

今年度より海外のレジデンス施設と連携し、相互にアーティストを送り出し、受け入れるというプログラムを開始。今回は韓国の光州市立美術館との間で、クォン・リョウォンさんが来福、福岡アジア美術館から古賀義浩さんが光州へ向かいました。光州は韓国の民主化運動の歴史の中で最も重要な都市で、アジアを代表する国際芸術祭として光州ビエンナーレを開催してきました。1992年開館の光州市立美術館は民衆芸術などの韓国における重要な作品を所蔵するだけでなく、2009年からレジデンス事業を継続的に実施し、若手アーティストの支援にも力を注いでいます。

FUKUOKA 福岡



《見とおしのよいところ（文）》（部分）2023年
撮影：川崎一徳

古賀義浩
Koga Yoshihiro

滞在期間：
2025.2.3 – 3.30

1986年生まれ、久留米市在住。2023年、当館レジデンスに参加。セメントやパラフィンなどを用いて、単純な行為の繰り返しを通してあらわれた形や、自分の個人史や土地の歴史とセメントの関係を作品として表現してきました。光州では日本植民地時代に作られた橋についてリサーチを重ね、その重層的な時間の流れに関する作品づくりを進めています。

GWANGJU 光州（韓国）【KOREA】

《Nest》展示風景、2024年

クォン・リョウォン
Kwon Ryeowon

滞在期間：2025.1.20 – 3.20

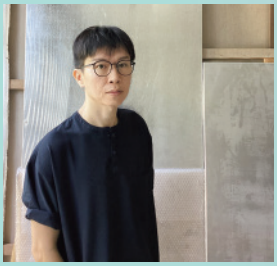
2000年生まれ、光州在住。「境界」をテーマに、定義されないものとの関係を紡ぎながら、特に社会で疎外されているものに着目し、写真を通して表現しています。今回の滞在では福岡の街を写真におさめる中で、街そのものの質感や、写真があらわす虚と実の曖昧さを見つめ、顕在化させる作品を制作しました。

同時期にこんなプログラムも！

交換レジデンス以外にも、あじびでは受入支援事業を展開。「ユナイテッド・オーバーシーズ銀行絵画展」で2022年、2023年の絵画部門賞を受賞した2名のアーティストが滞在しました。

シエ・ゾーリン
Seah Zelin

滞在期間：2025.2.12 – 3.11



《___CA_G ___E____》2024年

1980年生まれ、マレーシア在住。地図の概念を再考し、人と土地の関係、特に居場所を失った存在や個人と土地との不安定な関係について、見るものに考察をうながすような作品を制作。

ジェレミー・ヒア
Jeremy Hiah

滞在期間：
2025.2.12 – 3.11

1972年生まれ、シンガポール在住。1993年から絵画や彫刻、インスタレーション、パフォーマンスなど様々な方法を探求し、社会的、哲学的な表現を実践。

《The Coward To bury one's head in the ground is to ignore or deny the existence of a problem in the hope it will eventually go away》2023年

レジデンス制作作品公開

開催日程：2025.3.6 – 3.16　場所：美術館内各所

同時期に滞在したクォン、ゾーリン、ヒアの3人は、滞在の最後に作品展示を行いました。クォンは福岡で撮影した街の写真と石や木の葉の実物を重ねた作品を発表。ゾーリンは久留米でござ編みの工房を訪ね、いただいたイグサを使ったインスタレーションを発表しました。そしてヒアは、館内のトイレや図書コーナーという意外な場所にユニークでちょっと怖い妖怪の木版画を展示しました。

クォン・リョウォン《また会えますように》2025年

シエ・ゾーリン　《福岡マッピング／マッティング》2025年

ジェレミー・ヒア《本の虫の妖怪》2025年

EXHIBITION

コレクション展 Collection Exhibition

アジアコレクション この手が未来を編み直す

Asia Collection: Hands Reweaving the Future

2025.4.24［木］～6.22［日］
会場：アジアギャラリー［7階］

2025年度春のコレクション展は、アジアの暮らしや文化を取り込むことで、斬新な現代美術の表現を生んだアーティストたちの作品約50点を紹介します。布、糸、刺繍、籐細工、切紙などの素材の面白さと巧みな手わざ、さらに洗練されたデザイン感覚と造形力に注目です。手わざの力から、きらめく光と影の空間、そして瞑想の森へ。混迷を深める世界において、文化のルーツや暮らしに未来を生きるヒントを探ります。

イン・シウジェン（尹秀珍）［中国］《スーツケース2001》2001年　撮影：権藤真

ウー・ジエンアン（鄔建安）［中国］《手・脚》2008年（部分）　撮影：藤野拓人

モンティエン・ブンマー［タイ］《溶ける虚空／心の型（座像）（仏頭）》1998年

パンヤー・ウィチンタナサーン［タイ］《魂の旅》2001年

ウォン・ホイチョン［マレーシア］《暗い穴》2009年

タン・ダウ（唐大霧）［シンガポール］《米をつくる人々》1988年

ユン・ソクナム［韓国］《族譜》1993年

コレクション展 Collection Exhibition

ベストコレクションⅢ

Best Collection III

7.5［土］～11.30［日］　会場：アジアギャラリー［7階］

世界で活躍するスターアーティストの傑作を一堂に会して紹介する「ベストコレクション」展。第3弾となる今回は、7階アジアギャラリー全体を使い、これまでで最も大きな規模で開催します。それぞれの時代や地域を象徴するようなアジア美術の代表作の数々を、ダイナミックな空間のなかでご体感ください。

「オバケ？」展　© Keiko Sena

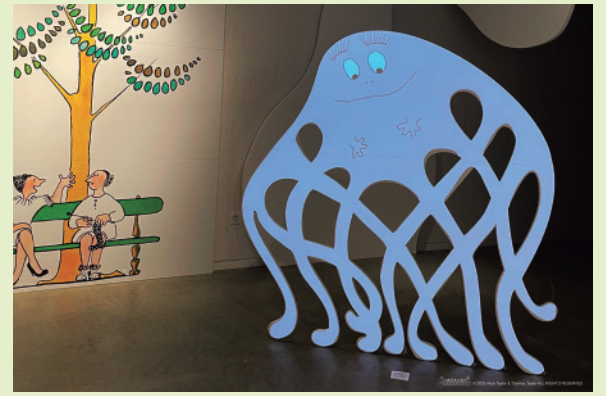
特別企画展 Special Exhibition

おいでよ！夏の美術館 vol.2 オバケ？展

Welcome! Summer Art Museum vol.2 Ghosts?

7.10［木］～8.31［日］
会場：企画ギャラリー［7階］
9:30 - 17:30［最終入場17:00まで］
※通常の観覧時間と異なります(会期中無休)

「絵本ミュージアム」の後継として、昨夏より始まった親子で楽しむミュージアム！
今年は、古今東西、絵本に、物語に、アニメに、落語にさまざまな姿で登場するオバケが大集結。「オバケ屋敷」「オバケ湯」「オバケ工場」などの体験型展示で、会いたくないのに、ちょっと会ってみたい摩訶不思議なオバケを楽しみ尽くす夏の展覧会です。


「バーバパパ」に会えるゾーン　PLAY! MUSEUMでの展示風景
© 2025 A.T. & T.T.

主催：福岡アジア美術館、西日本新聞社、テレビ西日本、西日本新聞イベントサービス　企画協力：ブルーシープ

特別企画展 Special Exhibition

ベトナム、記憶の風景（仮）

Vietnam, The Landscape of Memories (tentative)

9.13［土］～11.9［日］　会場：企画ギャラリー［7階］

ディン・キュー・レ［ベトナム］《南シナ海ピシュクン》2009年

グエン・ファン・チャン［ベトナム］《オーアンクァン遊び》1931年

ベトナム戦争終結50周年記念展となる本展では、その激動の歴史を辿りながら、近代のベトナム人画家が祖国の理想の風景を描き出した絵画から、個人の秘めた記憶をもとに歴史を語りなおす現代美術まで、ベトナムを巡って表現されてきたイメージや記憶を多様な作品から読み解きます。また特設コーナーでは三谷文化芸術保護情報発信事業財団による、ベトナムの絹絵の巨匠グエン・ファン・チャンの作品修復プロジェクトを紹介します。

SCHEDULE

2025年度　年間スケジュール

	2025 3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	2026 12月	1月	2月	3月
企画ギャラリー			協力企画展 ブラックジャック 主催：西日本新聞社、西日本新聞イベントサービス、KBC、東映 4.26～6.22		おいでよ！夏の美術館vol.2 オバケ?展 7.10～8.31		ベトナム、記憶の風景（仮） 9.13～11.9			12月～3月 小規模改修工事予定 ※期間中は休館します			
							FaN Week 9.13～28						
アジアギャラリー	ベストコレクションⅡ／韓国美術のリアリティ／レジデンスの部屋 ～4.8		アジアコレクション この手が未来を編み直す 4.24～6.22		ベストコレクションⅢ 7.5～11.30								

※展覧会タイトル、会期は変更することがあります

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum
https://faam.city.fukuoka.lg.jp

あじびニュースvol.96　2025年4月1日発行
企画・編集・発行：福岡アジア美術館　編集・執筆：後藤麻与、片桐絵都
デザイン：吉田朋史［9P］　印刷：株式会社四ヶ所

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1リバレインセンタービル7・8階　TEL 092-263-1100
7.8F, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan

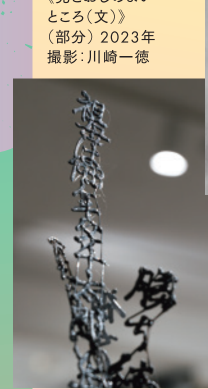
ギャラリー観覧時間　9:30-18:00（金曜・土曜は20:00まで）※ギャラリー入室は閉室30分前まで
開館時間　9:30-19:30（金曜・土曜は20:00まで）あじびホール、アートカフェ等
休館日　毎週水曜日（水曜が休日の場合はその翌平日）
年末・年始（12.26－1.1）

Artist in Residence TOPICS 2025

2025年2月、開館以来初！ 海外交換レジデンス・スタート

今年度より海外のレジデンス施設と連携し、相互にアーティストを送り出し、受け入れるというプログラムを開始。今回は韓国の光州市立美術館との間で、クォン・リョウォンさんが来福、福岡アジア美術館から古賀義浩さんが光州へ向かいました。光州は韓国の民主化運動の歴史の中で最も重要な都市で、アジアを代表する国際芸術祭として光州ビエンナーレを開催してきました。1992年開館の光州市立美術館は民衆芸術などの韓国における重要な作品を所蔵するだけでなく、2009年からレジデンス事業を継続的に実施し、若手アーティストの支援にも力を注いでいます。

FUKUOKA 福岡


《見とおしのよいところ（文）》（部分）2023年
撮影：川崎一徳

古賀義浩
Koga Yoshihiro
滞在期間：2025.2.3 – 3.30

1986年生まれ、久留米市在住。2023年、当館レジデンスに参加。セメントやパラフィンなどを用いて、単純な行為の繰り返しを通してあらわれた形や、自分の個人史や土地の歴史とセメントの関係を作品として表現してきました。光州では日本植民地時代に作られた橋についてリサーチを重ね、その重層的な時間の流れに関する作品づくりを進めています。

GWANGJU 光州（韓国）【KOREA】

クォン・リョウォン
Kwon Ryeowon
滞在期間：2025.1.20 – 3.20

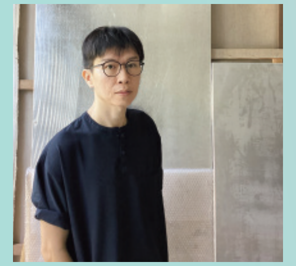
2000年生まれ、光州在住。「境界」をテーマに、定義されないものとの関係を紡ぎながら、特に社会で疎外されているものに着目し、写真を通して表現しています。今回の滞在では福岡の街を写真におさめる中で、街そのものの質感や、写真があらわす虚と実の曖昧さを見つめ、顕在化させる作品を制作しました。

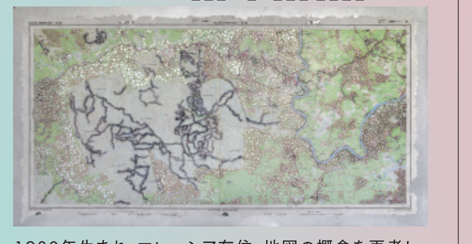
《Nest》展示風景、2024年

同時期にこんなプログラムも！

交換レジデンス以外にも、あじびでは受入支援事業を展開。「ユナイテッド・オーバーシーズ銀行絵画展」で2022年、2023年の絵画部門賞を受賞した2名のアーティストが滞在しました。

シエ・ゾーリン
Seah Zelin
滞在期間：2025.2.12 – 3.11




《___CA_G___E____》2024年

1980年生まれ、マレーシア在住。地図の概念を再考し、人と土地の関係、特に居場所を失った存在や個人と土地との不安定な関係について、見るものに考察をうながすような作品を制作。

ジェレミー・ヒア
Jeremy Hiah
滞在期間：2025.2.12 – 3.11

1972年生まれ、シンガポール在住。1993年から絵画や彫刻、インスタレーション、パフォーマンスなど様々な方法を探求し、社会的、哲学的な表現を実践。

《The Coward To bury one's head in the ground is to ignore or deny the existence of a problem in the hope it will eventually go away》2023年

レジデンス制作作品公開

開催日程：2025.3.6 – 3.16　場所：美術館内各所

同時期に滞在したクォン、ゾーリン、ヒアの3人は、滞在の最後に作品展示を行いました。クォンは福岡で撮影した街の写真と石や木の葉の実物を重ねた作品を発表。ゾーリンは久留米でござ編みの工房を訪ね、いただいたイグサを使ったインスタレーションを発表しました。そしてヒアは、館内のトイレや図書コーナーという意外な場所にユニークでちょっと怖い妖怪の木版画を展示しました。

クォン・リョウォン《また会えますように》2025年

シエ・ゾーリン　《福岡マッピング／マッティング》2025年

ジェレミー・ヒア《本の虫の妖怪》2025年

AJIBI News vol. 96

あじびニュース

人と人がつながるコミュニティをつくる

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

AJIBI Discuss

あじびのこと話そう

#03 教育普及

アーティスト・イン・レジデンスと連動したワークショップ

アジア美術の理解を深めるため、人との交流を軸にした体験的な教育普及活動を行うあじび。担当者たちが考えるこの取り組みの意義とは？ あじび学芸課から山木裕子、李昭賢、蒲池昌江が語ります。

山木（以下 山）　教育普及と一口に言っても内容が幅広いので、今回は教育分野に絞って話をしましょう。主な活動のひとつが、アーティスト・イン・レジデンス（以下 レジデンス）の滞在アーティストが子どもと行うワークショップです。

蒲池（以下 蒲）　あじびを象徴する事業であるレジデンスと連動させることで、独自性のあるワークショップが実施できていると思います。またアーティスト自身がプログラムを考えるので、内容もすごくクリエイティブです。

李　一般的なワークショップは お手本やキットがあって、明確なゴールが見えていることが多いですよね。でも、あじびのワークショップは 個々人の 創造力を大切にしていると思います。

山　多様な背景を持つアーティストと一緒に取り組めるのもポイントですよね。創作活動を通して、子どもたちが世界のさまざまな地域の文化に触れることができる。

蒲　あじびの施設を利用して、アーティストの技法を取り入れたワークショップが体験できるのも利点だと思います。部屋の壁に穴を作って、部屋ごとピンホールカメラにしたりとか、物語の登場人物のコスチュームを制作して、スタジオに大きなブルーバックを垂らして撮影し、背景を合成するといった大掛かりなものもありました。ちなみにそのワークショップを実施したのが、担任の先生が韓流好きのクラスで、10人くらいの中学生が「冬のソナタ」のペ・ヨンジュンになりきって、ずらっと並んでいる様子は圧巻だった（笑）。

一同　（笑）。

山木裕子（学芸課長）

李昭賢（教育普及室専門員）

蒲池昌江（美術交流室専門員）

答えは一つじゃない。アートとのふれあいを通してあじび学芸員が伝えたいこと。

WORKSHOP #1
2014年滞在アーティストのコビール・アフメッド・マスム・チスティー（バングラデシュ）とのワークショップ。「昨日見た夢」をテーマに、有田小と千代小の児童がアニメーション作品を共同制作した。

全てがオリジナル！

あじびのワークショップ

WORKSHOP #2

あじびの所蔵作品である《リキシャ》から発案した、オリジナルリキシャをつくるワークショップ。レジデンスの期間外でも実施できるワークショップとして、2023年から毎年開催している。

WORKSHOP #3
2009年滞在アーティストのアンキ・プルバンドノ（インドネシア）とのワークショップ。愛宕小、原小、誓願小の児童が参加し、不要になったおもちゃを組み合わせて新たな作品をつくり出した。

李　そうしたワークショップの数々を1999年から積み重ねてきたことも、あじびならではの価値と言えますよね。

山　多い時には1年に10種類くらい実施することもありましたしね。年平均13回で他の美術館と比べると圧倒的な数だと思います。

蒲　しかも「今回は小学何年生が50名来るので、それに合ったワークショップを考えてください」という感じでアーティストに依頼するので、全てのプログラムがオーダーメイド。

山　だからこれまでの活動をまとめたワークショップ集のような本を出したいんですよね。かれこれ10年くらいずっと言い続けているんですけど（笑）。本当に多種多様な実績があるので、「200名の中学生向け」や「特別支援学校の生徒向け」など、学校の先生たちにとってもいいヒントになるんじゃないかなと。

対話型鑑賞なら安心して発言できる

李　もうひとつの代表的な活動が対話型鑑賞ですね。

蒲　対話型鑑賞は、もともとはMoMA（ニューヨーク近代美術館）で開発された鑑賞法。ファシリテーターの3種類の質問に答えるというシンプルなものですが、美的思考はもちろん、観察力、認知能力、論理的思考、言語能力、コミュニケーション能力も高められるとされています。最近だと学校や医療現場、ビジネスパーソンの間でも注目されていますね。

山　対話型鑑賞のポイントは、何を答えてもいいというところ。現代の社会や学校は「正解」を求めがちで、間違いを恐れて発言できない場面も多いけれど、対話型鑑賞では「あなたがそう感じたのだから、それでOK」となる。

李　安心して発言できれば自己肯定感も高まるし、いろんな意見も出やすくなりますよね。

山　さらにその意見を聞いた人がまた考えを巡らせるから、思考がどんどん深まっていく。

蒲　鑑賞の価値が理解されるようになったのはすごくいいことだと思います。昔は図工や美術の授業も鑑賞より実技重視でしたよね。絵が上手じゃないとダメ、みたいな。ギターが弾けないから音楽が苦手だと思う人は少ないのに、なぜか絵が下手だと美術が苦手に感じてしまう。考えてみるとおかしな話ですよね。

山　私がまさにそれだった！上手に絵を描くんじゃなくて、その人なりの絵を描くことが大事なんですけどね。

蒲　正しさを追求するのではなく、たくさんの答えが見つかっていくのがアートの面白さ。観る人の数だけ答えがあるということを対話型鑑賞で体感できれば、社会課題に直面した時も、柔軟な発想で解決策を考えられると思います。

アートの世界に終わりはない

李　対話型鑑賞のファシリテーターを務めるのは、案内・解説ボランティアの方々です。中には開館当初からいらっしゃる大ベテランも。ボランティアさんたちの存在がなければ、教育普及の活動は成り立ちません。

山　毎日13時から15時まで展示室に常駐されていて、一般の来館者も気軽にガイドを依頼できる。美術館と来館者をつなぐ、とても重要な役割を担ってくださっています。

蒲　私たち学芸員よりも、来館者に近い立ち位置で話してくださるのがありがたいですよね。実際に「難しながら観られてとても楽しかった」や「一人で観ていたらここまで深くは理解できなかった」など、来館者の喜びの声を多くいただきます。そんなお土産を持ち帰っていただけるのは、ボランティアさんたちがいてくださるからこそ。

山　ただ、そうした力をお借りしながらも、まだまだアジア美術の面白さや奥深さを市民に伝えきれていないのがあじびの課題です。ワークショップや対話型鑑賞以外にも、もっと作品と人との交流の場を増やしていく必要がありますね。

蒲　そのためには、多様な来館者に楽しんでいただける仕組みづくりもしていきたいです。例えば高齢者を対象に、収蔵作品を活用した回想法のプログラムを展開するなど。

李　体の不自由な方に向けたプログラムなども展開できるといいですよね。あとは作品を鑑賞するためのツールももっと充実させられたら、その一環としてアートカードを学校に貸し出したいと思っています、市内の高校と一緒に学習プログラムを考えたりと、活かし方を模索しているところです。

蒲　「この作品を理解した」という終わりがないのがアートの世界。アジア美術の新しい答えがたくさん生まれるよう、これからも働きかけていきたいですね。

鑑賞のお供に！
あじびのアートカード

あじびの収蔵作品がプリントされたカードセット。来館前の予備鑑賞や来館後の調べ学習などさまざまな活用法があり、楽しみながらアートに親しむことができる。

「しゃべりながら観る」対話型鑑賞

美術館と来館者をつなぐ案内・解説ボランティアさん
来館者に対して作品解説や館内の施設案内を行う、あじびで活動するボランティアの中で最も育成期間が長く、養成研修に加えて実地研修も必要とされる。

学校見学のガイダンスの様子

REPORT

アジア美術の新しい楽しみ方がここにも！
展覧会の魅力を探る企画展関連イベント
人気のラインナップをレポートします。

約5500点の当館所蔵作品からアジア現代アートの傑作をご紹介する「ベストコレクション II ―しなやかな抵抗」展の会期中、当館ではさまざまな角度から作品の世界をお伝えすべく、今回初挑戦の試みもふくむ関連イベントを実施しました。そのレポートをぎゅっとお届けします！

「駱駝」を語りつくす！ あじびナイト・ダイアローグ

日時：2025.3/2　17:30–19:30
会場：福岡アジア美術館　アジアギャラリー
主催：福岡アジア美術館、Global Shapers Community Fukuoka

出品作品のひとつホアン・ヨンビン《駱駝》について、福岡在住の様々なバックグラウンドを持つ参加者が対話しました。異なる文化や宗教の要素が散りばめられた本作をどう読み解くかは千差万別。お互いの意見にびっくりしたり感心したりしながら、アートを通して対話することで自分とは違う新しい考え方や見方に出会う濃密な時間を過ごしました。

多言語（英・中・韓）によるギャラリーツアー

日時：【英語】2024. 12/8、2025.3/23【中国語】2025.2/1【韓国語】2025.2/23　各回14:00–14:45
会場：福岡アジア美術館　アジアギャラリー

当館を訪れる多様なルーツを持つ方々に向けて、英語・中国語・韓国語で本館の見所を解説する多言語ギャラリーツアーを初開催しました。各言語の話者の方のほかにも、語学学習中という方もお越しくださり、いつもと違う言語で語られる作品の魅力やエピソードに、熱心に耳を傾けられていました。

アジびをアジみ！

アジア美術をちょっと味見してみたらもっと知りたくなる、子どもから大人まで楽しめる3つのイベントを開催。子どもが自由に遊ぶ場所を手掛ける「PLAY！PARK」との共同企画によるものです。

日時：2/1～4/8
会場：福岡アジア美術館 アートカフェ
主催：福岡アジア美術館
企画：PLAY！PARK

「アジア料理と包む 遊ぶ」

あじびに巨大なアジア料理の遊具が出現！マントウ／パオズ（中国）に焼ぎりしたり、サモサ（インド）に包まれたり、生春巻き（ベトナム）に巻かれたり、身近な食べものを通して、子どもから大人までたくさんの方がまさに体いっぱいでアジア美術を「アジみ」しました。

「アジア吹管」

アジア各地の言葉で「だいじょうぶ」と書かれたカラフルな紙が舞い上がりました。参加した子どもたちはどの言葉をキャッチできるかと盛り上がり、声に出して言ってみたり、あじび特製のマフに貼り付けて集めてみたり、アジアの言葉にぐっと近づいた時間でした。

「ウタマのプロフ帳 ～いろんな私がいっぱいのプロフィール手帳をつくろう！～」

ホー・ズーニエン作品から企画したワークショップ。シンガポールの名付け親と言われる王「ウタマ」に無数の人物像や透話があることにならい、作品をみんなで鑑賞したあとに、自分のプロフィールを他の人に想像で描いてもらい、たくさんの自分が詰まったオリジナルの「プロフ帳」をつくりました。意外な自分像が見つかったかも？